

明治の遺産を 地域おこしに生かす



さかきばら すみお
榊原 純夫

はんだ
半田市長(愛知県)



こじま すすむ
小島 進

ふかや
深谷市長(埼玉県)



荒尾市

朝来市

深谷市

半田市



あさだ としひこ
浅田 敏彦

あらお
荒尾市長(熊本県)



たじ かつあき
多次 勝昭

あさこ
朝来市長(兵庫県)

司会・コーディネーター

いのうえ しげる
井上 繁

元日本経済新聞社論説委員

平成27年7月に世界遺産に登録された「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」の構成資産を含め、全国には明治時代につくられたさまざまな遺産があります。地域活性化をもたらす観光資源であると同時に、まちの景観形成や市民のシビックプライドの醸成など、ハード・ソフトを問わず、まちづくりのさまざまな分野で生かされています。

座談会では明治の遺産を地域おこしに活用する小島・深谷市長、榊原・半田市長、多次・朝来市長、浅田・荒尾市長にご出席いただき、それぞれのまちにある明治の遺産の特徴や、その活用策、さらには現状の成果、課題などについて、幅広くお話しただきました。

(本文中の役職名・敬称は一部省略しています)

明治の遺産を地域振興につなげる

井上 今年は明治元年から満150年という節目の年に当たることから、今回は明治の遺産に焦点を当てた座談会を開催することになりました。

明治の遺産と一言でいっても、世界遺産、日本遺産、近代化産業遺産、国の重要文化財など、さまざまな位置づけがあるとともに、そうした登録や認定を受けていない地域の魅力的な伝統や文化も数多く存在します。

それでは各都市にはどのような明治の遺産が

すべての市民が、明治遺産の保存・活用について、賛成しているわけではない、というシビアな目を持つことも大切です。



小島 進
深谷市長(埼玉県)

備わっているのか、それらを、いかに地域おこしに生かしているのか、お聞かせいただきたいと思っています。

小島 深谷市を代表する明治期の遺産といえばレンガです。従来から瓦生産が盛んで、レンガのもととなる良質な粘土が採れること、利根川の舟運により、東京方面へのレンガの輸送が可能であることから、郷土の偉人である渋沢栄一翁らにより、明治20年に「日本煉瓦製造会社」が設立されました。

この会社でつくられたレンガは、東京駅や旧司法省、日本銀行、赤坂離宮をはじめ、明治から大正期に掛けて、多くの近代建築物に使われてきました。

やがて、時代とともにレンガの需要が減少し、平成18年に操業を停止したものの、工場跡には「ホフマン輪窯」「旧事務所」「旧変電室」などの貴重な近代化遺産が現存しており、いずれも国の重要文化財に指定されています。現在は、工場跡の寄贈を受けた深谷市が、修復・保存活動を行うとともに、期間限定ながら一般公開も行っています。

また、深谷市内には渋沢栄一翁の生誕地に建設された旧渋沢邸「中の家」、その喜寿を記念して建築された「誠之堂」など、ゆかりの建築物も残っています。さらに、深谷市としても渋沢栄一翁の功績を顕彰するため、「渋沢栄一記念館」を設置し、多くの資料を展示しています。近年は、こうした明治に関連する地域資源も活用しながら、観光振興に力を入れているところですが、**神原** 日本のビール黎明期にあった明治中ごろ、寡占状態にあった大手4大メーカーに果敢に挑戦したビール会社が半田市にありました。

その会社が生産したビールの名前は「カブトビール」。戦時中の昭和18年に製造を終了しましたが、一時は10%以上の全国シェアを占めたこともある、人気のビールでした。

その発展の契機となったのが、明治31年の新ビール工場の建設でした。ドイツから技師を迎えて、本格的なドイツビールの醸造に着手した結果、明治33年にはパリ万国博覧会で金牌を受賞するなど、内外から高い評価を受けました。

建物の完成から約120年が経過していますが、かつてのビール工場は現在、「半田赤レンガ建物」として当時のままの姿を私たちに見せてくれています。明治建築界の三大巨頭の1人、妻木頼黄が設計を担当したほか、明治時代のレンガ建造物としては日本で屈指の規模を誇るなど、建築物としての価値も高く、平成16年



渋沢栄一翁生誕地に建つ旧渋沢邸、通称「中の家(なかんち)」(深谷市)

半田赤レンガ建物は、
先人たちの心意気を
象徴する建物。
今やまちのシンボルとして
すっかり定着しています。



榊原 純夫
半田市長(愛知県)

には国の登録有形文化財に指定、そして平成21年には経済産業省の近代化産業遺産にも認定されました。

平成8年に土地と建物を半田市が買い取り、平成14年から年に数回にわたって一般公開してきましたが、平成26年6月から翌年6月まで行われた耐震改修工事を経て、観光施設としてリニューアルオープン。これを機に常時公開に切り替えました。

地域を代表する有力な観光施設ですが、市民にとつては、大手メーカーに敢然と立ち向かった

地域の先人たちの心意気を象徴する建物。今やまちのシンボルとしてすっかり定着しています。

多次 朝来市は、かつて日本一の銀の産出量を誇った、生野鉱山があるまちです。織田信長、豊臣秀吉、徳川家康など時の権力者にも重視され、江戸期には幕府直轄の天領として活発に鉱山経営が行われてきました。

明治期に入ると、今度は政府直轄の官営鉱山となり、近代化を先導する模範鉱山として、フランスから多くの最新技術が導入されました。その後、明治29年に三菱合資会社に払い下げられて以来、70年以上にわたって三菱による経営が行われました。

生野鉱山の開発が進むにつれて、その活況は周辺地域にも及びます。生野鉱山への大型機械の搬入、そして産出された銀などを輸送するため、姫路市の飾磨港から生野鉱山へと南北一直線に貫く「銀の馬車道」(全長49km)が整備されたほか、生野鉱山から明延鉱山、中瀬鉱山へと続く「鉱石の道」(全長24km)も形成されていきました。

朝来市では、こうした産業道路を軸にしながら、その沿道に点在するさまざまな遺産、遺構等の文化財を生かして、播但地域全体の活性化を目指そうと、関係する姫路市、福崎町、市川町、神河町、養父市に呼び掛け、平成28年度に共同で日本遺産申請を行いました。残念ながらこの年は認定を逃したものの、その教訓を生かして、翌年度も再申請。関係自治体との連携をより強化するとともに、ストーリーや構成文化財の練り直しを進めることで、認定を受けることができました。

浅田 荒尾市と、隣接する福岡県大牟田市にまたがる形で存在するのが三池炭鉱です。江戸時



かつてのビール工場で、現在は常時公開の観光施設「半田赤レンガ建物」(半田市)

代中期から採炭が始まりましたが、明治6年に官営となり、明治22年に三井組に払い下げられて以来、本格的に炭鉱経営の近代化が図られました。やがて、三池炭鉱の中心的存在となる「万田坑」が荒尾市内に開坑。当時の最新の設備や機械が導入され、2つの竖坑が建造されました。同時に、採炭が最盛期を迎えた昭和初期には、住宅や学校、病院、娯楽施設が三井の資本で整備されるなど、荒尾市は炭鉱のまちとして大きく成長を遂げていきます。

やがて、万田坑は昭和26年に採炭が終了し、平成9年に三池炭鉱が閉山を迎えましたが、翌10年には国の重要文化財に、平成12年には炭鉱施設としてはわが国では初めて、大牟田市の宮原坑とともに国の史跡に指定されました。平成22年からは、一般公開も行っています。



明延鉱山の選鉱施設として建設された「神子畑選鉱場跡」(朝来市)

平成18年に行われた九州地方知事会議において「九州近代化産業遺産の保存・活用」が決定されたのを機に、関係自治体が連携し、世界遺産の登録への取り組みがスタートしました。以来、たびたび構成資産の組み替えなども行われましたが、最終的に平成27年には、万田坑を含む、23資産で構成される「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」が世界遺産に登録されることになりました。

シビックプライドの醸成にも一役

井上 各都市とも、それぞれの条件や特性に応じて、活発に取り組みを進められていることが分かりました。それでは、そうした取り組みによって、どのような成果が表れているのか、お聞かせいただきたいと思います。



これからは文化財の「保存」にとどまらず、地域の活性化につながるよう、積極的に「活用」することも大切になってきます。

多々 勝昭
朝来市長(兵庫県)

浅田 平成27年に世界遺産に登録されたことで、万田坑の認知度も向上し、その来場者数は、前年度比3倍以上の約11万3000人に上りました。このように、世界遺産効果は、非常に大きなものがありました。残念ながら長続きはしませんでした。翌年度は熊本地震の影響もあり、およそ半分の約5万5000人に激減、平成29年度は約4万5000人と減少が続いています。

小島 マスメディアに大々的に取り上げられ

ば、一時的に交流人口は増えるでしょうが、それを長期にわたって継続するのは並大抵のことではありません。明治の遺産を活用しながら、目に見える形で成果を出し続けるのは、容易なことではないと思います。

深谷市では、洪沢栄一翁をテーマにしたシンポジウムを開いたり、埼玉県が全国の企業経営者を対象に「洪沢栄一賞」を授けるなどしていますが、このような活動を地道に続けることこそが大切なのだと考えています。

浅田 同感です。来場者数の減少傾向を一気に覆すような方策は難しいと私も考えています。それよりも、単に「見る」だけの施設見学的方式から脱却し、「体験」型のメニューを増やしたり、炭鉱システムの流れがよく理解できるよう、分かりやすい表示を進めるなど、訪れた方々の視点に立った改善策を講じることで、少しずつ来場者の増加を図っていきたくと考えています。

多々 日本遺産の認定は、関係自治体の努力だけではなく、住民の皆さんの理解・協力がなければ、成し得ないものでした。認定後は、一連の活動を通して、市民の間にも、事業に対する理解が高まっただけでなく、まちに対する誇り、愛着なども生まれました。これも、取り組みの成果の一つでした。

榊原 確かに、市民の理解は大切です。そもそも半田赤レンガ建物を市が買い取り、保存・改修を進めることができたのも、市民の理解があったからこそでした。また、市民団体の「赤煉瓦倶楽部半田」の協力によって、当時のレシピを基に、明治・大正当時の復刻ビールを製造、販売することもできました。現在、カブトビールが飲めるのも、この団体の皆さんのおかげです。

時間的にも金銭的にも
余裕のある退職者などを
対象とした、「大人の修学
旅行」の展開に期待を
寄せています。



浅田 敏彦
荒尾市長(熊本県)

課題は維持管理の費用確保

井上 市民の理解や、まちに対する誇りの醸成は非常に重要な要素ですね。そうした成果が現れている一方で、それぞれの市ではどのような課題が浮き彫りになっていますか。

浅田 荒尾市における一番の課題は施設の維持管理に要する費用の確保です。万田坑の面積は7 ha、炭鉱専用鉄道敷跡の面積は6 haと、それぞれの遺産の面積も広く、相当なコストが掛かります。さらに、まだ修復・整備しなければい

けない施設も多く残っています。国庫補助なども活用していますが、市としても一定の投資が必要になってきています。

榊原 半田市も状況は同じです。半田赤レンガ建物の運営に関しては、指定管理者制度を導入していますが、施設の入場料だけではとてもその運営費をまかなうことはできません。毎年、市の一般財源から持ち出しをしています。

確かにこのこと自体、大きな課題ではありませんが、例えばこれが歴史的な城郭なら、あまり批判も出ないでしょう。実際、お城を持つ都市も、維持管理のために、一定の負担をしているはずです。半田市にとって、半田赤レンガ建物は城郭と同じくらい大切なまちのシンボルですから、その負担は温かく見てほしいというのが本音です。

浅田 そのためにも、重要になるのが、やはり市民の理解です。特に、まちの未来を考えると、子どもたちへの教育は欠かせません。万田坑はまちの発展の原点ですから、小中学生に対しては炭鉱施設の見学をカリキュラムに位置付けています。

小島 深谷市でも、市独自の道徳副読本「渋沢栄一こころざし読本」を市内小・中学校の全児童生徒に配布し、渋沢栄一翁の心を受け継ぐ教育を推進しています。また、渋沢栄一翁の出身地であることに誇りを感じている市民も少なくありません。

ただし、その一方で、すべての市民が、こうした明治遺産の保存・活用について、賛成してくれているわけではない、というシビアな目を持つことも大切だと思います。その意味では、なるべく税金を使わずに施設の保存・活用がで



明治日本の産業革命遺産「万田坑第二豎坑櫓」(荒尾市)

きるよう、クラウドファンディングを活用したり、まちを訪れてくれる人を増やしたり、お金を落としてもらうための仕掛けを施すことも大切になってきます。

多次 そうした仕掛けの一つとして、朝来市の第三セクターの観光施設「史跡・生野銀山」では、ユニークな試みを始めました。坑道などに展示されている鉱山労働者姿の60体のマネキン人形を「GINZAN BOYZ(ギンザンボーイズ)」と称し、「地下アイドル」として売り出そうと、プロモーションビデオの発信や「総選挙」と銘打った人気投票を行うなどしています。インターネット上でも注目が集まり、近年は「史跡・生野銀山」の入場者数も増えています。

浅田 明治の遺産を生かした試みとして、荒尾市で大いに効果があったのは、映画のロケ誘致



井上 繁
元日本経済新聞社論説委員

でした。撮影スタッフの宿泊や飲食などによる経済波及効果は大きなものがありました。

また、県境を越えて隣接する大牟田市と連携して、修学旅行の誘致にも取り組んでいます。が、今後は「大人の修学旅行」の展開にも期待を寄せています。時間的にも金銭的にも余裕のある退職者を中心に、ゆつくり時間を掛けて、荒尾市や周辺地域の観光資源をめぐってもらおう。そうした新しい観光に向けたアプローチも進めていきたいです。

榊原 半田赤レンガ建物でも敷地内の芝生広場を活用して、月に1度、知多半島の作家の作品や、新鮮食材などを販売したり、ワークショップを行ったりする「半田赤レンガマルシェ」を開催していますが、毎回、多くの人でにぎわっています。

また市内には、日本最古の現役駅舎ともいわれるJR亀崎駅がありますし、JR半田駅には現存する日本最古の跨線橋もあります。こうした明治の鉄道遺産を内外にPRするとともに、半田赤レンガ建物と連動したイベントなども実施して、地域活性化に結び付けていきたいと考えています。

多次 旧来、行政は文化財の「保存」に力を入れ

てきましたが、これからは、それだけでは不十分です。地域の活性化につながるよう、「保存から活用へ」という考え方が必要になってくると思います。

広域連携が観光振興を後押し

井上 まちづくりや観光振興を効果的に進めるためには、複数の自治体で連携して取り組むことも大切です。最後に「広域連携」に対する、各市長のお考えをお聞かせください。

多次 日本遺産の認定は、6市町の連携、さらに兵庫県や地元新聞社、さらには住民の皆さんの協力があってこそ実現できましたが、その連携を今後も維持、強化していきたい。さらに、関係自治体全体で交流や文化財の活用も積極的に進め、播但地域全体の地方創生につなげていければと考えています。

榊原 観光の連携は極めて大事ですね。半田市では、必ずしも明治遺産に関する取り組みではありませんが、醸造品の一大産地だった共通点を生かして、常滑市、碧南市、西尾市と連携し、広域で観光振興を進めています。

浅田 荒尾市でも「明治日本の産業革命遺産」の構成資産に入った自治体との連携を深めていきたいと考えています。もちろん、資産の分布範囲は広大で、すべての自治体と連携することは難しいでしょうが、製鉄や石炭産業など、テーマを区切り、地域的なブロック化を図ることで、魅力的な広域観光の展開、PRにつなげていけると考えています。

小島 日本煉瓦製造会社がつくったレンガを使った建物は東京を中心に、さまざま地域に点在しています。今後は深谷市としても、そう

した建造物をめぐるツアーなども考えてみたいですね。

井上 多次市長から「保存から活用へ」という考えが示されましたが、これからの地域おこしを展望するにあたって、これは大事な考え方だと思います。明治の遺産をうまく活用することで、経済的な活性化を実現するだけでなく、市民の地域への愛着を高めることもできます。さらに、教育への活用を通して、子どもたちに先人の志を伝えることもできます。それらは地域おこしを進めるにあたって、大きな武器になるはずです。

今後とも、市民と手を取り合い、また、複数の自治体と連携しながら、地域の財産である明治の遺産を活用し、まちの発展につなげていただきたいと思います。本日は、ありがとうございます。

(平成30年6月6日、全国都市会館にて開催)
本コーナーは隔月掲載となります。次回は9月号に掲載予定です。

